エルサレムへの道

ルカ福音書18:31-34

18:31 さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。
18:32 人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。
18:33 彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」
18:34 しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった。

【祈りながら考えよう】

（１）「らくだが針の穴を通るよりも難しい」と言われた、罪人が救われて神の国を受け継ぐ者にされるのは、どういう神のわざによってなされるのですか。
（２）旧約聖書でキリストの受難のことが詳しく記されているのは、どの預言書の何章ですか。
（３）聖書で、イエスのことを「人の子」と呼ぶのはどういう意味でですか。

【解　説】

（１）弟子たちは驚き恐れた

《裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい》（ルカ18:24-25）

この主の御言葉を聞いた人々は、では結局人間は、神の国に入る望み、永遠のいのちの望みは持てないではないか、と言った。その時イエスは、「人にはできないことが、神にはできる」と語られた。

神の国に私たちが入らせていただくこと、永遠のいのちに生きることは、神のなさる働き、人間の側のどんな働きにもよらないということを、この前の所で学んだ。

では「このらくだが針の穴を通るよりもっと難しい」、罪人が救われて神の国を受け継ぐ者にされるということは、どういう神のわざによってなされるのか。そのことが今日の課題である。

イエスの一行はすでにヨルダンの東からヨルダン川を渡って、ユダヤの地に踏み込んだあたりであったと思われる。その地点において、弟子たちに、受難の予告が語られたと考えられる。この所は、共観福音書のいずれにもある記事で、マタイ福音書20章17-19節、マルコ福音書10章32-34節にある。少しずつ違うが、同じ記事が並行してある。

マルコ福音書では、《さて、一行は、エルサレムに上る途中にあった。イエスは先頭に立って歩いて行かれた。弟子たちは驚き、また、あとについて行く者たちは恐れを覚えた》とある。

この時は、弟子たちが驚くほど、イエスは弟子たちの真っ先に立ち、何か厳粛な姿においてエルサレムを見つめ、エルサレムに向かって行かれる様子であった。いつもは見ることのできない（イエスの様相）に、弟子たちは驚き怪しみ恐れたとある。

（２）受難の予告

《さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された》。マタイによると、《十二弟子だけを呼んで》とある。だから、イエスがこれから述べられる言葉は十二弟子だけに特に語られた言葉である。

《さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです》。イエスは受難の予告をなさる。これでイエスが受難の予告をなさること３回目である。

第１回目は、ルカ福音書では、９章２２節である。そこで、イエスが弟子たちに、「群衆はわたしのことをだれだと言っているのか」と尋ねられた時に、弟子たちは「群衆は、あなたのことをバプテスマのヨハネの再来だと言い、あるいは預言書のエリヤだとか、あるいは、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています」と、答えた。

その時、イエスが、「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」と、問われた時、ペテロが、「あなたは神のキリストです」と答えた。それに対してイエスが語られた、

「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです」。これが第１回目の受難の予告である。

ペテロが、「あなたは神のキリストです」と答えたキリストは、地上で栄光の道をたどるキリストである。しかし、主はそれを正された。キリストは受難の道をたどることを告知された。しかし、弟子たちには、よくわからなかった。

第２回目は９章44節。《このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。人の子は、いまに人々の手に渡されます》簡単であるが、これも同じくキリストが人の手に渡されて殺されるという予告である。

第３回目の受難の告知が、最も具体的に詳しく、なまなましく述べられる。マタイ福音書においてもマルコ福音書においても、同じくイエスは前後３回受難についての予告をはっきりと弟子たちにだけ与えておられる。

（３）旧約聖書に預言されたキリスト

《さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです》

旧約聖書のどんな所に、キリストについての預言を見ることができるのか。旧約聖書全体にキリストについて預言されているとも言えるが、イザヤ書から取り上げる。

まず、イザヤ9章6-7節、

《ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる》。

また、イザヤ11章1-9節、

《エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる。

狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである》。

ここに、すばらしい理想的王がこの世界を統治し、理想的な世界の実現が預言されている。キリスト再臨による千年王国である。自然界もその様相を新たにする。人間は戦いをやめ、平和となり、自然界もまた平和な自然界となる。

次に、イザヤ42章1-4節、このあたりからの預言は、主のしもべの預言、主のしもべの歌である。

《見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。
彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。島々も、そのおしえを待ち望む》

キリストの姿である。マタイ福音書でここの箇所が、イエスについての預言として引用されている。《彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない》（マタイ12:20）と。

イエスが、このような預言のもとに、現れておいでになったことがわかる。

（４）栄光の王は受難のしもべの姿で

それから、イザヤ53章を読む。ここに来ると、その理想的な栄光の王は、まず受難の道を通らなくてはならない。栄光の王たる前に、理想的王としての統治をなされる前に、民の罪を贖わなければならない。そこにメシヤのメシヤたる、キリストのキリストたる、このお方でなければならない神のわざが担わされている。そういうことが53章において明らかにされてくる。

いきなり栄光の王ではない。いきなり理想的な世界が実現するのではない。人間だれもができないことがなされなければならない。すなわち人間はこのままでは救いに入ることはできない。それは、らくだが針の穴を通るより難しい。だから神がなされる。どういう方法においてか。それが53章である。

《私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現れたのか。彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった》

この理想の王メシヤは、どんな姿において、この地上に現れなければならなかったか。栄光の姿においてか。うるわしい姿においてか。そうではない。だれもが忌み嫌うような姿において、メシヤはこの地上に姿を現される。

《彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない》

この世の人が慕い求めるような姿、うるわしさはイエスにはなかった。イエスのもとにつどい集まって来た者たちはどういう人たちだったか。いわゆるこの世の栄光を求めてやまない人々ではない。

この世の権力者たち、学者たち、宗教家たちではない。そうした道から全く外れてしまった、この世の栄光から全く外れてしまった落後した者たち、取税人、罪人、闇の女たち、そうした類いの人々がイエスのもとに集まって来た。

《まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった》

イエスは彼らの病を負った。悲しみを担った。だから彼らは救われ、いやされていった。私たちは、自分の弱さ、悲しさ、不都合、あるいは肉体の弱さ、肉体の病をイエスは引き受けて下さる方だと知る。

（５）十字架は私の罪のため

《だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと》

イエスは私たちの罪を負い、汚れを負い、病を負い、あらゆる災い、醜さを一身に負って下さるお方である。身近にいる者もこれを知らなかった。イエスのために悲しむ者はあったが、そのイエスの悲しみを負われた姿を、あのみじめに十字架を負って、悲しみの道を一筋にカルバリの丘に進まれたイエスの姿を、あのように侮られ、ののしられて、恥を一身に受けていかれる姿を、誰が私たちのため、自分のためと思った者があっただろうか。

ルカ福音書23章にイエスがこの恥の十字架、みじめな十字架を負って、その道を行かれた時、

《大ぜいの民衆やイエスのことを嘆き悲しむ女たちの群れが、イエスのあとについて行った》（27節）とある。イエスのこの姿を見て、みんながイエスに同情し、イエスのために痛み、泣いてイエスについて行った。

《しかしイエスは、女たちのほうに向いて、こう言われた。「エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけない。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい》

わたしのために泣くのではない。イエスのみじめな姿は、エルサレムの娘たちのためだ。罪人たちのためだ。泣くなら自分の罪のために泣くがいいと言われた。みんなイエスのために泣き悲しんだが、それが自分の罪のためだと思っていなかった。

創価学会の人は言う、「十字架にかかって、みじめに死んでしまうような人を信じたって、なんで救われるのか」と。これは、何もわかっていない人を代表する言葉である。その方たちに言いたい。あのイエスの十字架のみじめさは、みなさんたちのためなのだと。しかし、イザヤが預言しているように、誰も自分のためだとは思わなかった。

《しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた》

メシヤの苦しみは、みな私の罪のためである。むちで打たれた傷跡、兵士から蹴飛ばされて傷つく足の傷、みな私が受けるべきものをイエスが受けられた。イエスが、ののしられた嘲笑、侮り、そのすべてが私のためである。私が受けるべきものを、主が体で全部受け取って下さった。私たちこのがんこな罪人が、いくら砕かれようと思っても少しも砕かれはしない。かえって、がんこさを増すばかりである。イエスが、私に代わって神からの砕きを受けて下さった。

（６）受難は神の御心による

《彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた》

何も懲らしめられる必要のないお方が、不忠実で不従順で、従うことを知らない、かたくなな罪人、ただ自分のことしか思うことのできない罪人のために、代わって懲らしめを受けて下さった。だから私たちは大きな懲らしめを受けないで、こうして安らかにあることができる。

私たちはどんな懲らしめを受けたことがあるだろうか。少しばかり思うようにならないことに遭った時、少しばかり痛みを感じた時、神もなにもあるものかと、神に対して大口をたたく者である。だから、神の御子キリストが私に代わって、私たちに代わって全部懲らしめを受けていて下さる。それが十字架である。

《彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし》、懲らしめの代わりに私たちに平安を与え、**《彼の打ち傷によって、私たちはいやされた》**。第1ペテロ２章後半に引用されている。キリストの傷は私の罪のいやし、傷のいやしなのである。

《私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない》

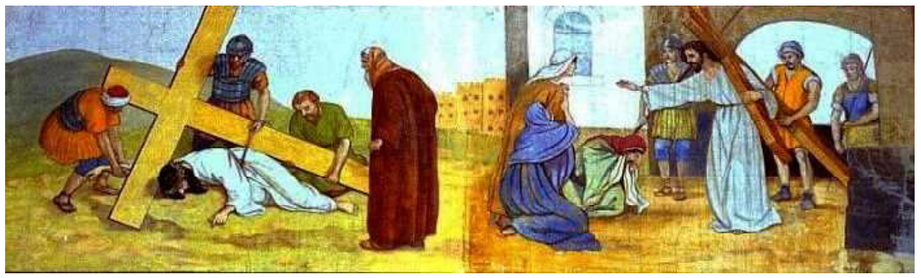
イエスが不当な審判を受けられた時、どうだったか。一言も弁護せず、罪名、不当な扱いをすべて黙って受けていかれた。一言も自分をかばうための発言をされなかった。イエスは黙っておられたとある。

《私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った》。私たちは皆、自分、自分である。自分の道、だれにもこの自分の道を邪魔されたくない。ただ考えているのは自分の幸せの道、自分の栄光の道。

しかし主は、全く異なる。**《しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた》**。全く自分を殺し、不当をこのまま、黙って受け取って、**《彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない》**。

《しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、そのロに欺きはなかったが》

イエスには、罪はなかったが、強盗と一緒に扱われ、強盗と一緒に処刑されて、強盗のように殺された。しかしこれは神様の御心だった。



（７）救いはただ愛の奇跡

《しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった》

主は、私たち人間を救うために、愛のゆえに、神の御子の上に、すべての砕きを置かれた、すべての悩みを置かれた。この道においてのみ、私たちは救われることができる。

私たちの側に救いになるものは何にもない。全部神の側にある。神のなされたみわざのゆえに、らくだが針の穴を通るよりも難しいこの私たちの救いの奇跡がここになされる。私たちが救われるのは、神のこのような愛の奇跡である。

《もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる》

神のしもべなるイエスが、神のなされるがままに、ご自分を死に渡していった時、結果はどうなるか。そのことによって、子孫を見ることができ、主の民を起こすことができ、永遠に救われる者、神の国を共にする者を持つことがおできになった。

（８）人の子は再臨のキリストとして来られる

ダニエル書7章13-14節に、

《私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない》

ここに、**《人の子のような方が天の雲に乗って来られ》**とある。イエスがこの言葉を、最後の審判の時、大祭司の前で使われている。再臨のキリストである。このようにしてすべての人間の罪を負い、とがを負って、砕かれざるその罪のかたさを自ら身をもって砕かれて、死んでよみがえられた。そこを通って再臨のキリストとして再びおいでになる。

その預言が、このダニエル書7章13-14節の預言である。その時に千年王国が実現する。世界はすべてキリストの統治に入る。そしてこれがさらに永遠なる神の国につながっていく。

だからメシヤはどうしても受難の道を通らなければならない、ということが預言書を読んでいればわかる。いきなり理想の世界とはならない。まず受難の道を通り、人間の罪の問題を解決しなければならない。神の国はこの世界の延長ではない。この世界は終末を告げ、新しいキリストによる統治が始まる。

（９）イエスの道は十字架への道

《さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです》

（人の子）というのは、先ほどのダニエル書の7章13節にあった預言から、ユダヤにおいては人の子と言えばメシヤの代名詞というふうに、みんなに知られていた。

だからイエスはご自身のことを語られる時、特に重大な事を語られる時に、ご自分のことを人の子と呼んでおられる。自分のことを自分でキリスト、あるいはメシヤとイエスが呼ばれている所は一箇所もない。人の子と呼んでおられる。そのことによって、このキリストは、旧約預言の成就者であるということが、よりはっきりわかる。

《人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります 》

マタイ、マルコの方を見ると、**《さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです》**とある。これは両方相補って読むべきである。まず、イエスを捕らえたのは、同じユダヤ人の指導者である祭司長、律法学者、ユダヤの最高議会サンヘドリンの議員たちであった。そこで、死罪を宣告して、それから、ローマ総督ピラトの手に渡して、その処刑をさせた。

だから、このルカ福音書に書かれていることの前に**《人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです》**という言葉がまず入る。それから、**《人の子は異邦人に引き渡され》**、すなわちローマ人の手に渡されて、**《そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。彼らは人の子をむちで打ってから殺します》**、十字架で殺される。

イエスがローマの兵隊に罪人として引き渡される。その時、兵隊たちはイエスを散々からかって、なぶり者にする。あざけられ、はずかしめを受け、つばきをかけられ、あるいは顔を叩かれ、蹴飛ばされ、裸にされてむち打たれ、そうして十字架につけられた。

何の侮りも受ける必要のないお方が、ありとあらゆる侮りを受けられた。侮りを受けるのは、この罪人なる人間の側だ。それを、イエスは、私たちの罪とはずかしめを一身に負って下さって、私たちが受けるべき侮りを、全部ご自身の身に受けて下さった。私たちの受けるべき罪の懲らしめを、全部ご自身に受けて下さった。私たちが打たれて死ぬべき死を、イエスが全部受けて下さったのである。イエスは、このためにエルサレムへ上って行かれる。

（10）何一つわからなかった

《しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった》。**《彼らには》**、主のことばの意味は**《隠されて》**いた。なぜ彼らがこのことにこれほど鈍感だったのか理解しがたいが、おそらく次のような理由からであろう。

弟子たちは、自分たちをローマの圧政から救い出し、ただちに御国を打ち立ててくれる（この世の）救い主を待ち望んでいたのであり、それ以外の計画は考慮に入れていなかった。

私たちにも、自分が信じたいことを信じようとする傾向、前もって考えていたことと違うことは（たとえそれが本当のことであったとしても）受け入れようとしない傾向がある。